学芸大生がひらくサスティナブルな未来プロジェクト

ちえのわ農学校

1．活動タイトル

「ちえのわ農学校」

地域の小学校４年生から中学校３年生とともに、食農文化体験活動を通じて「種から胃袋まで」の道のりをたどることで「いのちを大切にする」という当たり前のことを見つめ直すきっかけづくりを目指している活動である。

2．活動グループ

サークル　ちえのわ

2002 年度より学芸大学の公開講座として開催されていた「ぬくい少年少女農学校」の学生スタッフを中心に、2005 年度から活動を開始したサークルである。現在は「ちえのわ農学校」を中心に様々な過活動を行っている。

活動代表者　　Ｆ類環境教育専攻　３年　　和田 綾子

3．活動の具体的内容

（1）フィールドワーク

①実施日

第５回活動　2006 年８月 19 日（土）

②対象者

参加者(小 4～中 3)　22 名、スタッフ　約 15 名

③目　的

大学周辺の小金井地区を歩き、自分が関わっているこの地域の街の様子や農業について興味・関心をもつきっかけにする

④ねらい

・小金井地区を歩いて、街のつくりや様子・普段は気に留めていなかったようなスポットやお店を見つけて、小金井地区への興味・関心を高める

・小金井地区で育てられている野菜・その野菜にまつわるお話などを実際に農家の方から聞いて、農を仕事として実践している方たちから新しい刺激を受ける

⑤講　師

小金井市在住　大堀さんご夫妻

⑥協力者

NPO 法人 ミュゼダグリ　土井さん、林屋さん

⑦具体的なスケジュール

【準備段階】

・7 月 14 日(金)　打ち合わせ

・7 月 26 日(水)　依頼のため講師宅訪問

・8 月 11 日(金)　学大生スタッフ 8 名で実踏　危険箇所の確認等を行う

・8 月 15 日(火)　最終打ち合わせ

【活動当日】　　8 月 19 日(土)

・荷物（水筒・帽子・保健バッグ等）を準備し、4 グループに分かれてグループごとにルートを決定し、おやつスポットなどを回りながら徒歩で大堀さん宅を目指す

・全グループが到着したところで大堀さんから小金井の農業の歴史を聴いて、畑を見せていただく

・帰りは CoCo バスに乗り、大学へ戻る

(2) フィールドワーク広報

①目的

農学校の活動を多くの学芸大生に知ってもらうこと、小金井地域を知るきっかけのひとつにしてもらう

②具体的なスケジュール

・8 月 9 日(水)　学芸大学生向けのチラシを作成する

サ棟入り口に 2 枚、階段脇に 1 枚、第 5 回農学校のスタッフ参加の募集広告を掲示する

残念ながら、参加の申し込みはなかった

(3) 秋冬野菜の栽培

①実施日

第 6 回活動　2006 年 9 月 16 日(土)　　第 7 回活動　2006 年 10 月 21 日(土)

第 8 回活動　2006 年 11 月 11 日(土)　　第 9 回活動　2006 年 12 月 16 日(土)

第 10 回活動　2007 年 1 月 13 日(土)

②参加者

参加者(小 4～中 3)　22 名

③目的

「種から胃袋まで」の具体的な実践として、自分たちで野菜を育てて、収穫・調理し、食すことで農作物の存在・いのちを身近に感じてもらう

④ねらい

・前半の春夏野菜に続き、一人一畑の「わたしの畑」を行うことで、ひとりひとりの主体性・自発性を高める

・野菜の育つ過程を身近に感じてもらい、野菜に対する興味や関心を育てる

⑤具体的なスケジュール

第 6 回（9 月 16 日）	第 7 回（10 月 21 日）	第 8 回（11 月 11 日）
・野菜と担当スタッフの決定 ・野菜ノート作成と今後の計画 ・畑づくり ・種まき	・種まき ・お手入れ作業（雑草処理、間引き、水遣り） ・野菜ノート作成と今後の計画	・お手入れ作業（雑草処理、間引き、水遣り、肥料入れ） ・一部収穫 ・料理して食す ・野菜ノート作成と今後の計画
第 9 回（12 月 16 日）	第 10 回（1 月 13 日）	
・収穫、料理（保存食づくりの材料） ・料理して食す ・野菜ノートの作成	・収穫 ・料理して食す ・野菜ノートの作成	

4．活動の成果

（1）地域とのつながり

普段生活しているものの、ほとんど無関心であった「小金井」という土地に目を向けることで、その街のつくりや様子、抜け道（この道はどこへ繋がっている など）や美味しいお店など、些細だけれどいざというときに役に立つ情報を得ることができた。フィールドワークで使った道を通るたびにその時のことが思い出され、小金井の街中を歩く際に非常に役に立っている。

また、今回の講師費の助成によって地元の農家の方に講師を依頼することが可能となり、活動内容に深みをだすことができた。地元の人の話を直接聴けたことは活動を運営していく学生スタッフをはじめ、農学校参加者にとってその後の秋冬野菜栽培に対する意識向上に繋がった。

実際に、講師の大堀さんから伺った「給食残飯で作られた肥料」を小金井市の施設からいただいて自分たちの畑の肥料として利用するなど、フィールドワークや地域の方から得た情報を積極的に活動に取り入れている。

（2）活動を通じた学び

今年度の活動では、春夏野菜・秋冬野菜ともに「わたしの畑」という形式で栽培を行ってきたが、フィールドワークで自分たちとは目的の異なる「職業としての農」を五感で感じたことで、秋冬野菜の栽培では子どもたちの野菜に対する向き合い方が春夏に比べて真剣であったように思う。特に今回は助成金で野菜の図鑑を充実させたことで、野菜の育て方を時間をかけて深く突き詰めて考えることができた。自分の野菜の手入れをするのは自分自身と限られたスタッフという状況の中で、愛情とこだわりを持って率先して手入れをしていたことは「手入れをしなければ野菜は死んでしまう。手をかけた分だけおいしく育ってくれる。」ということを身をもって感じてくれたからではないかと考えている。活動終了後のアンケートでは保護者・参加者ともによい評価をいただき、参加者の次の活動に対する強い意欲・向上心も感じられた。

スタッフにとっても学べることは非常に多い活動であった。参加者の野菜ノートに活動日以外の成長記録をつけることで日々野菜と接し、参加者のサポートをしながら自分自身も愛着を持って野菜に向き合えていた。それまでは畑作業に興味のなかったスタッフや野菜の成長過程を把握できていなかったスタッフも、順調に育たない野菜に対して経験者と積極的にコミュニケーションを取って改善を図っていた。野菜にとって良い方法を模索しながら努力してきたことは、スタッフ自身が「いのちの大切さを考える」きっかけとなった。また、「教える」のではなく「一緒に考える」という参加者と同じ目線で活動したことで、自分の知識獲得だけでなく、責任感や新たな閃きや興味を生むことができた。

生きもの相手というのは、参加者と触れ合う活動日だけでなく、日常の生活の中でも積極的に関わることが必要となるので、正直なところスタッフにかかる負担は大きなものであった。しかし、参加者が喜ぶ姿を見て感じた満足感・達成感は、スタッフにとって最高の学びになった。

一致団結してひとつのことに取り組み、それを達成できたことは来年度の活動への大きな励みになると思う。

今度も明確な目的をもって常に努力し、活動を継続していきたい。